

# 紅いコッツペリア

文月文

この作品は「月姫」(TYPE-MOONの世界及びキャラクターを借りて作られています。秋葉ノーマルエンドの後日談であるためネタバレを含んでおります。)ご注意ください。

がらりと軽い音を立てて引き戸が開けられた。  
ふいに少年の鼻腔に強烈な匂いが叩きつけられる。  
締め切った部屋の中には血と……女の香りが蟻っていた。

部屋の真ん中。

蒲団の上にきれいな人形がちよこんと正座をしている。

真紅の着物。そして、それ以上に紅い長い髪が部屋を覆っているかに思えた。

部屋中を覆う紅。

それはある連想を少年にさせた。

血。  
真つ赤な血。

嗅覚と視覚から叩きつけられる強烈極まる刺激に少年は目眩に襲われる。

この部屋に足を入れた途端、少年の正気が徐々に崩れて行く。

ぼろぼろ。ぼろぼろと。

ゆっくり、確実に正気というメッキが剥がれ、その下に潜む狂気に表に現れていく。

「秋葉」

呼べども人形は応えない。

透き通った海の色を持つ双眸は、ただ虚空をぼんやりと眺めたまま。  
理性という不純物を持たぬ瞳にとっては、少年も部屋の置物の一つなのかもしれない。

「……秋葉」

再び、少年は壊れてしまった妹の名を呼ぶ。

やはり人形は止まらなかったまま。

少年は軽く頭を振った。

「兄さん？」と答える声を……淡い期待を振り捨てるが如く。

「よく眠れたかい？」

問えどもやはり人形は応えない。

少年は一瞬辛そうな顔をした後、カッターシャツのボタンを外していく。

男にしては白いうなじが現れた途端、人形に息吹が吹き込まれる。

獲物を狙う獣のような目。

それはたしかに生あるものの目だ。

それが少年の言う秋葉なのかどうかはわからないが。

「お腹空いたろ？」

ゆっくりと少年は秋葉に近づく。

怯えさせないように気づかないながら。

お互いの息がかかる距離まで近づいたとき。

ふいに秋葉の首が動く。

唇がかすかに開き、そこから赤い舌が現れた。ちろちろ。ちろちろと舌が蛇のように少年の首筋をゆつくりと舐め上げる。背筋を震わす快感に少年の身体は弛緩した。まさにその瞬間を狙うように白い牙が光る。

つぷり。

牙が少年の肌を裂く。

「つっ」と呻く声が出たかと思ふとゆつくりと鮮血が滲み出てきた。流れ落ちる紅い甘露が喉を潤す。

そのあまりの甘さに秋葉は恍惚に打ち震えた。食欲という原初の欲求を満たす喜び。

だが、牙はすぐに首筋から離れた。

牙が突き立てられたのはほんの一瞬。

首筋からじわりじわりと染み出る血に秋葉はごくくりと喉を鳴らす。染み出た血は溜り雫となる。

雫はついつと首を流れて行く。

はあはあと荒い吐息をあげつつ血の航跡をじつと眺める。

その紅い誘惑を断ち切るように秋葉はぎりつと唇を噛み締めた。

ふうと一息漏らした後、穿たれた穴に口をつける。

牙によって付けられた傷は浅い。

その傷痕を癒すようにべろべろと舐めはじめた。

食事の時は舐め方が全然違う。

念入りに。念入りに。労るような愛情を持って傷痕をきれいに舐めあげて行く。すると、どういう理由かは解らないが牙がつけた傷は塞がっていった。

「つっつっつっつのか？」

少年には血を吸っている時の秋葉の表情はわからない。

彼にわかるのは口元を真っ赤に染めて呆けている秋葉の顔のみ。

だが、さすがに不審に感じはじめている。最近の秋葉の食事は形ばかりのものになっていったからだ。

「それだけで満足なのか？」

血で汚れた秋葉の口をハンカチで拭きつつ心配げに問う。

されど、秋葉は応えずただじつとしていた。

聞こえてないのか、無視しているのか？

改めて、問い返そうとしたと少年が思った瞬間。

秋葉が抱き着いてきた。

そして再び首筋に口をつける。

食事の量が足りなかったのだと納得した少年は、黙ってそれを受け入れた。

——だが、どうも様子が違う。

秋葉はただ首筋をなめるだけ。

一心不乱にべろべろと舐め続けるだけ。

血を吸おうというのでもなければ、傷口を塞ごうというのでもない。

この心地良い感覚をもたらす舐め方は——。

少年が葛藤している間も秋葉の舌の動きはとまらない。

舌はゆつくりと首から耳に這って行く。

耳たぶを口に含むと半ば遊ぶように舌の上で転がしはじめた。

それだけでも、ぞくりとした感覚が背筋を上ってくる。

声を漏らすまいと力を入れた瞬間、かぷりと耳たぶを甘噛みされた。

不意打ちに「はうっ」と少年は呻いてしまう。

「？」

その変化を秋葉は不思議そうな顔で眺めていた。

真っ赤になって何かを言おうとする少年。

その唇が開いた瞬間。

秋葉の視線がふいに柔らかくなった。  
同時にごく自然な流れで唇を合わせてくる。  
口中に入ってくる柔らかかな舌。  
錆びた鉄の味……血の味が少年の味覚を刺激する。  
流れてくる少女の唾液を嚥下しつつも、最初に入ってきた血の味の強烈さは一向に衰えない。

ぴったりと彼を抱きしめる少女の身体。  
病み衰えてはいるものは、少女特有の柔らかさは健在だ。  
何よりその身体中から女の匂いが漂ってくる。  
それらが少年の残った正気を完膚なきまで砕こうとしていた。  
けれど……。

少年は動かない。  
性欲を覚えつつもそれを抑えて、ただ黙って秋葉のするがままにされている。  
黙って耐えているしか無い。  
下手に動けばそのまま秋葉を押し倒してしまいかねないほどに、少年は危ういバランスの上に立っていた。

秋葉の唇がゆっくりと少年の唇から離れる。  
唾液が光る線となり二人の間を結んでいた。  
結ばれていたのは一瞬。音もなく線は……切れた。  
それを見ていた秋葉は哀しげな顔をした。  
その顔を見続けるのがたまらないのか、今度は少年の方から彼女の唇を塞ぐ。  
口づけを受けると秋葉の表情は途端に柔らいだ。  
見ようによっては微笑んでいるようにも見える。

「どうした秋葉？」

秋葉の変化に気づいた少年は唇を放すとそう問うた。  
ぴったりと志貴に抱き着いた秋葉はそのまま体重を預けてくる。

甘い吐息とかすかな鼓動。  
そして何より溢れてくる女の匂い。  
少年は秋葉が何を望んでいるのかはつきりわかってしまった。  
——抱かれない。  
その意図を感じ、慌てて少年は秋葉から離れる。  
いささか乱暴だが、崩壊寸前の理性を保つにはそうするしかない。

「……あ」

残念そうな甘い声が少年の耳に届く。  
彼は困ったように視線を外し俯いてしまう。  
もちろん、その行為自体が嫌いなわけではない。  
むしろ、好きな子と二人きりでいるのだから抱きたくなるのが普通だ。  
とはいえ、秋葉は壊れている。  
壊れてしまっただけから、異常な状況に血が昂ぶり抱いてしまったことはあった。  
意志の無い妹に自分の劣情をぶつけてしまった……その罪悪感が棘のように心に刺さって彼自身の性欲を抑えている。  
だが、そう思いつつも、結局何度も何度も少年は秋葉を抱いてしまっていた。  
秋葉がそれを望むから。

今の秋葉には理性はない。当然欲求を素直に表に出す。  
食欲、睡眠欲に匹敵する性欲。  
それが最近、日ましに強くなっているかに少年は思えた。  
食事の量の減少に比例するが如く、セックスの頻度が上がっていく。  
最近は何日、それも一度で終ることは少ない。  
理性が無い分、自然に求めてくるのだ。

もつとも頻度が高いとはいえず、飽くまで血を吸われ続けるよりは身体に負担はかからない。  
楽になったといえはいえるだろう。

だが、意志のない子を抱くということに元が真面目な少年には抵抗がある。  
兄として妹を抱く……ということには抵抗は無い。

血の繋がりが無いこともあるが、好きなもの同士が愛し愛されることの何が悪いと思っっている。

そう、好きなもの同士という自信があれば。

だが、壊れた妹が何を考えているのか兄にはわからない。

いや、何も考えられるわけがない。

考える理性が無いのだから。

それが少年には哀しかった。

結ばれた時の彼女の嬉しそうな顔を鮮明に覚えているがゆえに。

今は、性欲だけで彼を求めているとしたら……余りに哀しすぎた。

「……」

悩んでいる少年に向かって無言で秋葉は近づいてくる。

「秋葉、俺はな……」

何かを言おうと手を開いた少年に向かって、秋葉は体重を預けてきた。

すっかり病み衰え、小鳥のように軽くなってしまったその身体を。

「……えっ？」

驚いている少年の胸の中に顔を埋めて秋葉ひたすら甘えている。

まるで恋人にするように。

正気だった頃の秋葉にはできなかった素直さで。

全幅の信頼をその身で示している。

「あ、き、は……」

「ためらいがちに呟く言葉に、紅い髪の少女は顔をあげた。

見上げるその青い瞳は穏やかで幸せそうに見える。

それは少年の思い込みに過ぎないのかもしれない。

だからこそ、最後の理性を振り絞って宣告した。

「だめだ。駄目だよ。秋葉。俺はおまえをこれ以上壊すわけには……」

泣きながら呟く言葉は途中で遮られる。少女の唇によって。

軽い口づけの後、妹の唇は兄の頬を伝わる涙を掬い取る。

泣かないでと言っているかのように。

「秋葉……」

兄の脳裏に妹の言葉が蘇る。

最初に彼女を抱いたとき。

躊躇した彼に向けられた言葉が。

「……お願いします。私を壊してしまいそうだっていうんなら——それこそ、いっそ壊してください。兄さんにつけられる痛みなら、私は必ず耐えてみせますから」

「秋葉……おまえ、なんでもないっていいのか。俺が、俺の無力がおまえを壊してしまったというのに」

悔恨の言葉ごと、秋葉は兄の身体をぎゅっと抱きしめる。

自分の言葉に妹が応えた……と彼は思いたかった。

秋葉は壊れていない。今でも遠野志貴の妹の遠野秋葉だと。

「いつか、私が変わり果ててしまった時、それまで私の事を愛してくれていたのなら、私のために殺してください」

彼女から託された約束を、志貴だけに託された約束を、彼は未だに果たしていない。

「すまない、秋葉。そうだよな、おまえはこういうことを『どちらかというと、スキなのかもしれない』って言ったしな」

涙を堪えながら、からかうように妹にそう話しかける。  
彼は秋葉の表情の無い顔に拗ねたような雰囲気を感じた。  
気位が強くて素直じゃない彼女は、よくそういう反応をしたものだから。

——全ては自己欺瞞。

変わってしまったても懐いてくれる妹の姿に、昔日の面影を見ようとしている行為。

変わってしまったと認めれば殺すしかない。

それが彼女との約束だから。

だから、変わっていない。

秋葉はずっと秋葉のままだ。

遠野志貴の妹で、そして恋人。

「秋葉、本当のことを言うとな。俺はおまえのことを欲しくて仕方なかったんだ。だから……」

いつものように肌を重ねる。

それが二人の日常だから。

何も変わっていない——。

——数刻後。

志貴は秋葉の髪をややきつめに編んでいる。

長い髪というのは痛みやすい。ましてや寝たきりのことが多い秋葉ならなおさらのこと。

髪をまとめておくことで、髪の痛みを少しでも抑えようとしているわけだ。

美しかった秋葉を美しいままにしておこうという志貴なりの努力であった。

「痛くないか？」

髪を編みつつ問いかける。

秋葉は黙ってされるままにしていた。もつとも今の秋葉は感情を素直に現すので、痛かったら嫌がるわけだが。

「でも、きれいだよな。おまえの髪って」

先程、風呂に入れたこともあり、ほのかにシャンプーの匂いが香る髪は見ていても触っていても心地よかった。

ふいに白いうなじが目に入る。

そこには、いくつものキスマークがついていた。

今日の情交の時に彼がつけた印だ。

普段は琥珀や翡翠の目を気にし、可能な限り跡は残さないようにするのだが、今日に限っては首や胸、身体中に跡が残っている。

まったく抑えが効かなかったからだ。

兄が求めれば求めるほど、妹は応えた。

病みつかれてやせ衰えた身体で必死に——。

少なくとも、そう彼は思った。思い込んでいた。

「？」

髪をいじる手を止めたことを不思議に思ったのか、秋葉はゆっくりと振り返った。

その顔は、彼女が壊れてから見たこともなかったほどの穏やかさがある。

激しい情交の後とは思えないほど柔らかな顔をしていて。

いや、後だから……というべきか？

「ごめん。今までちゃんと抱いてあげなくて……淋しかっただろう？」

答えはこない。ただ、虚ろな目は彼の全ての想いを飲み込んでしまう。

それが答えだと彼は思った。

「悪い兄貴だったな。ずっとおまえを一人にして……こうなっても一人きりにして  
たんだから」

相変わらず秋葉はちよこんと正座をしたまま黙って聞いている。

「これからはいられるだけ一緒にいよう。ここで秋葉と一緒に寝起きをして……そ  
うだ、おまえ、俺が寝起きが悪いって怒ったことがあったよな。起きないからって  
あまりいじめないでくれよ」

「ちよんと細い腕が志貴の腕に触る。

それはおそらく偶然手が動いただけだろう。

だが、彼は思い出していた。

あまりに起きないからと、腕をつねられたことを。

「……」

懐かしい思い出に。帰らぬ思い出に思わず胸が熱くなる。

壊れてない。

秋葉は壊れてなんていない。

志貴は、すべての秋葉の行動をポジティブに取ろうとしていた。  
現実逃避といえはそれまでだろう。

だが、兄妹にとってはどうでも良いことだった。

彼らさえ幸せなら、間違っていようが狂っていようが構わない。

彼らが見、聞き、感じたことが真実。

それだけで十分だった。

彼は秋葉を引き寄せると抱きしめる。

今日、何度めかの抱擁。

しかし、これほど優しく抱きしめたのは今日が……いや、秋葉が壊れてから初め  
てだろう。

「じゃあ、今日は戻るな。色々用意しなくちゃいけないから。明日まで……いい子に  
していてくれ」

愛おしそうに真紅の髪を撫でながら耳元でささやく。

少女の方は目を閉じ気持ち良さそうに撫でられていた。

名残惜しそうな顔をしつつも、少年は手を放し部屋を後にする。

その顔は心身の労苦でやつれてはいたがとても晴れやかだった。

すうっと、静かに扉は閉ざされた。

再び漆黒の闇と静寂が部屋を支配する。

その闇の中で、彼をずっと見送っていた紺碧の瞳がふいに煌く。

さきほどまでは微塵もなかった意志という名の光りを得て。

§

§

真つ暗な部屋で少女は微笑む。

正座を崩して自分の膝を抱きしめながら。

まるで、先程得た体温を逃すまいとするかのように。

突然。

音もなく扉が開いた。

柔らかな月光が部屋を包む。

その変化は特に秋葉の興味を誘わなかった。

膝の上に頬を寄せ、扉から見える白い月をぼんやり眺めている。

「秋葉さん……ですね」

女の声が部屋に響く。

されど秋葉は無視している。

「いい加減にしたらどうですか？ このままでは死にますよ。遠野くんもあなたも」

静かな恫喝にも秋葉はまるで動かない。

その反応にカソック服を着た少女は声を荒げる。

「いつまで狂っている演技をしてるんですかー！！」

「――演技じゃないわよ」

低く静かに言葉紡ぐ。

視線は相変わらず、外。白い月の方を見つめたまま。

「な……」

「誰かは知りませんが、他人の家を訪れたのなら先に名乗るが礼儀ではなくて？」

か細い声だが言葉ははっきりしている。

その声に青い髪の少女は目を細めた。

敵意寸前の警戒の色を全身から発しつつ秋葉を注意深く眺める。

理性も知性も十二分。

声音から感じる気迫も昔日のまま。

「秋葉さん、やはりあなた……」

だが、相変わらず秋葉は視線を外したまま。

睨み合いすらできない。

ふうと、軽く息を吐くと芝居がかった口調と仕種で自己紹介を始める。

「覚えておいででないなら失礼しました。わたしは教会の者で、シエルと呼ばれています」

「教会？ 狩人なら問答無用で私を狩れば良いでしょうか？」

「ぼそぼそと興味なさげに言葉紡ぐ秋葉。」

素つ気無い態度は自信の現れなのか、諦観なのかはシエルの目から判別できない。

わかるのはただ一つ。

彼女の予想通り秋葉には理性が見えるということ。

かと言って、正気と決めつけるのは危険過ぎた。

カマをかけるべく言葉を選ぶ。

「遠野くんには、シエル先輩と呼ばれましたけど」

すると、静かに秋葉の顔がシエルの方を向く。

紺碧の視線と青い視線が絡み合う。

「……今は？」

ぶつきらぼうに秋葉は呟く。

低く、短く。

それは絶大なる自信の現れか？

「今は……」

秋葉とは逆に口籠もつてしまうシエル。

狙いすましたようなカウンターにシエルの全ての計算は水泡に帰す。

凍りついている青い髪の少女に、紅い髪の少女は満足そうに微笑む。

「今、兄さんは私以外、何も見えない」

もはや興味がないとばかりに再び視線を外してぼんやりと月を眺める。

「遠野くんを独占できればどうなっても構わないのですかー？」

「それだけが望みだもの」

怒声を歌うような声が打ち消す。

軽やかに優雅にそして決然と声は続く。

「兄さんは、私だけを見てくれる。それ以外、何もいららないわ」

その一言で勝敗はあっさり決まってしまった。

しかし、シエルとしても簡単に引き下がれない。

これぐらいで引き下がらるくらいなら、わざわざ姿を現せたりはしない。

「……あなた、戻りたくはないのですか？ 昔のあなたに。こんな未来も何もない状態から抜け出したくはないのですか？」

「シエルさんはこの髪を、この衝動を治せるとでも？」

「それは今すぐにはできません。わたしの記憶の中の魔術を引き出すことが出切れれば——」

「結局できないのでしょうか？ それに……出来たとしても治りたくないもの」  
「なっ……」

思わずシエルは絶句してしまふ。

この答えをシエルは予想をしていなかったわけではない。

しかし、単なる予想とそれを実際に言われるのではインパクトが違う。

最悪の答え。

それを導き出す式をシエルは口にする。

「まさか、あなた『反転』して満足だとしてもいいのですか」

こくり、とそっぽを向いたまま秋葉は頷く。

「人間でなくなつた私を、兄さんはこれ以上もなく優しくしてくれる。あんなに優しくしてくれるなら——遠野の血に恐れおののいていた私が馬鹿みたい」

再びシエルは言葉を失つてしまふ。

自分の理性が弾き出した答えは全て当たっていた。

感情が否定しようとしていた答えが。

「シエルさん。あなた兄さんが好きなのでしょう？」

シエルの動揺を気にした風もなく、何気なくそう問う。

秋葉は痛が強い。少なくとも彼女の知っていた秋葉はそうであった。

ここで正直に答えることは逆鱗に触れるおそれがある。

しかし、シエルは敢えて正直に答えることにした。

「はい。男女としての好意というよりは、尊敬という言葉に近いかもしれませんが」  
「そう。兄さんがあなたに興味を示したなら……あなたも闇の世界の人なのね」

「聞？」

「兄さんが興味を示すのは同類だけよ。あの人は七夜。天性の殺人者の一族の生き残り。いくら普通を装ったところで身に潜む血は生きている」

そのことはシエルも知っている。

シエルの得意の飛び道具では無くナイフでの戦いだったとはいえ、彼はシエルを圧倒した。常人の数倍の身体能力と百戦錬磨の経験を持つシエルを、ただの高校生が。

ほればれするような技量だった。

まさに殺人の天才としか言いようがない。

「……たしかに、わたしは闇の世界の住人ですね。この手は吸血鬼と……無辜の民の血で真っ赤ですから」

「ふうん。なら、あなた兄さんのことが理解できるのね。私も本当に兄さんのことが理解するには人を殺した方が良いのかもしれない」

ごく普通の口調でそんなことを言う秋葉。

彼女の力を持つてすれば、五人や十人を血祭りにあげるのには簡単だろう。

「でも……。男と女の間ではわかりあう必要なって無いんですよ。知ってます？ シエルさん」

「説明していただけるでしょうか？」

「兄さんは八年前の私にはあんなに優しくしてくれたのに、成長した私には全然優しくなかったんですよ。私の中身は何も変わっていないのに、表面上の強気を見たら、もう守るべき妹とは思ってもらえなくなってしまう」

くりくりと彼によって編まれた髪を弄びながら秋葉は話を続ける。

「けど、兄さんの学校に転校して私が右往左往してしまつた時、兄さんは優しくしてくれた八年前と同じように……嬉しかった」

「知ってます。わたしもその場にいましたから」

シエルの答えに興味を覚えたのか秋葉はシエルの顔を覗き込む。

「ああ、失礼しました。あなたはたしか先輩でしたね。兄さんと仲が良い。ずいぶん前のことなると、服装が全然違うので気づきませんでした」

「いえ……」

秋葉の言葉が本当かどうかはこの場合たいして意味がない。

過去はどうあれ、今のシエルなど秋葉の眼中に無いということの意味するのだろうか。

「私は気づいたのでですよ。兄さんが望んでいた秋葉というものを。それは、兄さんの手助け無しには生きていけないか弱くて儂い存在。今の私なんてまさにびつたり」

「遠野くんのために、ありもしない妹の演技をはじめたというのですか！」

くすくすと笑う声に、低い声でシエルは呟く。落ち着いてはいるが怒気が孕んでいた。

「ええ。いけません？ 私の望みは兄さんに愛されることですから」

無邪気な笑顔を浮かべつつ秋葉は答える。

良い考えを思いついた子供のように得意げに。そこには罪悪感の欠片もない。

「みんな演技をしているじゃありませんか。琥珀は翡翠の。翡翠は琥珀の。兄さんは普通の人という演技。あなただって、何かの演技をしているのでしょうか？」

「……」

無言でシエルは秋葉を睨んでいる。

たしかにその通り。シエルは自分の心を偽っていた。

それには理由がある。立場、過去、目的……されど、どんな理由をあげたところで事実は事実だ。

「思えば、兄さんと別れてからの八年間の方が演技だったのかも知れません。遠野家当主としての演技をしていただけ。兄さんが帰ってきて、元の無力な私に戻つたとしたら？」

「それでも、言葉も喋れないほど狂ってはいないでしょう！」

シエルの叫びを秋葉はただ自らの髪束で遊びつつ聞き流す。

「喋ることはできませんよ」

「現に喋っているじゃありませんか！」

「喋れないではありません。『喋ることができない』のです。私が正常なら兄さんは今ほどの興味を失うわ。だから、喋ることができないの」

「そ、それは……」

それはあまりに哀しいじゃないですか……シエルはその言葉を飲み込む。

恋人の愛情を得るために人形になるなんて。

だが、否定はできない。

シエルは知っている。恋焦がれたゆえに狂ってしまった男のことを。

目の前の少女も同じではないか？

全てを捨てて恋のみに生きる者。

善悪も正邪も彼岸の彼方に置き去りにして、ただ恋だけを胸に歩き続ける者。

「あなたは悔しくないのですか？ あなたにそこまで強いる遠野くんの無神経さを！」

彼自身は善人だ。そのことはシエルも百も承知だ。

しかし……善人の無神経な善意に人がどれだけ踊らされ傷つけられることか？

「平気……と言ったら嘘になるでしょうね。ただ、私は最初に恋に狂ったおかげで、こうなってもお父様やシキのように獣にならなくて済みましたから。それだけは感謝してもしきれません」

編まれた紅い髪をシエルに見せつける。

その紅い髪は彼女が人でなくなったことの証。化生であるもの証。

「恋に狂う……？」

「吸血？ 殺人？ 強姦？ 好きな人の前でそんなみっともない姿を見せられるわけないでしょう？ 私は遠野の娘である前に『女』なのです。どちらが根源的なものか考えるまでもありません」

楽しそうに秋葉はくっくっとして笑う。

「兄さんは血を吸う鬼ができるのを未然に防いだのですよ。私を恋に狂わすこと。ふふっ、さすがは最後の七夜。退魔の一族の生き残りということかしら？ 今なら遠野の血に生まれようとも鬼となる力は残ってはいませんか」

「力はあるじゃないですか？ 吸血種としての力が」

その言葉を受けて、秋葉はゆっくりと立ち上ろうとする。

両足に力はいらないのか、壁に手を付きながら、ゆっくりゆっくりと。

そして、シエルに問うた。  
「私にどれだけの力が残っていると思いますか？」  
全身がカタカタと震えている。自分の体重すら支えられないほど秋葉の四肢は衰えていた。

「あなた、遠野くんの血を吸っているんでしょ？ なのになんで……」

「血？ 最初は『遠野』に負けて血を吸ってしまったけど、最近では形ばかり口をつけるだけよ。兄さんに吸血鬼と思われたくないから、本当は吸いたくないけど、全然口にしなかったら心配するし」

自分の体調よりも、志貴にどう見られるかを第一に考えている。

秋葉の性格すればそれはありえるだろう。

だが、いかに強烈なプライドを持っていようともどうにもならない問題はあ  
「馬鹿なこといわないでください。真祖じゃないのだから食欲を抑えられるわけがないでしょう！」

「抑えられないから別の欲求に変えているのよ。吸血鬼だと思われるくらいならえつちな子だと思われた方がまだましです！ 男女の営みはまだ人間の行為だもの」

声を荒げたことが障ったのか秋葉は両足から崩れて蒲団に座り込んでしまう。  
思わず、助け起こそうとするシエルを手で制し話を続ける。

「ふふっ。ありがたいことよね。身体が弱れば弱るほど遠野の血も弱くなって、私の心ばかりが強くなる。ううん、私の望みはただ兄さんのものになる、それだけのことだから反転衝動とやらも『私』の後押しをしてきているのかもしれないね」

目の前の吸血種は衰弱しきっている。

シエルの想像を遥かにこえるほどに。  
これほど弱っているのは本人の言うように他者を襲えないだろう。  
標的を捉えるための移動もままならないのだから。

不思議なのは、少なくとも遠野志貴がいる前ではこれほど弱ってはいるように見えなかったことだ  
「気力で『普通』を演じてたとしてもいいのか？」

「なんで、そんなになるまで身を削れるんですか？」

「だって……兄さんの血を吸うと、兄さんが弱っちゃうじゃない」

肩をすくませながら秋葉はそう告げた。  
たしかにそれはその通りだ。

常時貧血気味の志貴の血を吸うことは間接的に殺すようなものである。  
輸血をしたところで、事態はそうは変わらない。  
輸血というのは他者の血を入れることだ。

感染症とまではいなくても、アレルギー反応や抗体不全を起こす危険性と背中合わせである。

単純に無くなった分だけ追加すれば良いというものではないのだ。

「それ以外は何も食べていないのですか？ 吸血鬼ではなく吸血種なのだから、他に食べようと思えば食べれるでしょう？」

「嫌よ。そんなことすれば兄さん以外の人が私の世話をできるじゃない」

信じられなかった。

いくら寝たきりの生活とはいえ、生きていだけで相当の熱量がいる。

あんな舐める程度の血で身体が維持できるわけがない。

秋葉の場合、特殊な事情で普通に食事を採ったところで十二分な熱量を得られないのだ。

志貴の愛情を独占するためには餓死の道すら平然と選ぶというのか？

そこまでやる必要があるのか？

何がそこまで彼女を駆り立てるといえるのか？

「わからない」

カソック服の少女の言葉から無意識にその言葉が漏れてしまう。

それを紅い髪の少女は半ば憐れむような目で見つめる。

「わからないの？ 兄さんは誰にでも優しいのよ。同じ闇の者ならね。翡翠にも琥珀にも——シエルさんにも。違う？」

「それはわかります。しかし——」

「ここまでやらないと兄さんは駄目なのよ。私のことだけを見続けさせるにはね。」

あなたにはできないの？」

ふるふると首を振るシエル。

地獄を見ているにも関わらず、いや、地獄を見ているからこそ愛や恋に夢を持つてしまう。

恋というのはもっと、ポジティブなものではないのか？

二人で共に未来を築くというようにな……。

しかし、透徹した目でシエルを見やる秋葉は知っている。

恋のもう一つの顔を。

恋は狂気を破滅をもたらしという古今東西変わらぬ真理を。

「無理もないわね、翡翠も琥珀もできないわ。だから……兄さんは私のものなのよ。何の努力も策も無しに最高の愛情を得られ続けるわけが無いでしょう？」 最高

は一瞬だから最高なのよ。後は恋の名を持つ残骸よ。そんなもの、私はいらない」

力強い目。シエルがかつて学校で見た気位の高い遠野秋葉がそこにいた。

何がか弱い？ 何が儂い？

目の前にいるの間違いなく鬼だった。恋慕の鬼。

「だからといって、死ぬことは……」

「わからない人ね。私はもう人間として生きていけないのよ。誰かに殺されるか、自分で死ぬしかの二者択一しか残ってないの」

それはわかっている。

理由は違えど同じ苦しみを知っているシエルには。

だからこそわからない。

ここまで割り切ることをできる秋葉の心理が。

「私はこうなる前に兄さんに何度も殺してってお願ひしたのよ。兄さんに愛されたまま死ぬことがどれだけの幸せか、愛する兄さんの手にかかることの充実感が

……兄さんは全然わかってない！ あのトーヘンボクが……！」

「……」  
「そりや、兄さんはいいわよ。見ているだけなんだから。勝手に夢でも希望でも妄想できるわ」

秋葉は自分の胸を右手で押えつつ熱い口調で言葉を続ける。

「でも、私はどうなるのよ？ 吸血衝動を持ったまま放っておかれる私は？ 他人は襲えない。兄さんの血を吸い続ければ兄さんを殺しちゃう。……できることなんて自殺だけでしょう！？ それもこんな持って回った一番苦しい死に方をしなくちゃならない。いい？ 私をここまで追いつめたのは兄さんなのよ！ ……最後くらい私の好き勝手にやって何が悪いのよ！」

怒っていた。

紅い着物と紅い髪に負けぬほど真っ赤な怒りの炎に彩られている。

激昂で両目からははらはらと涙を落しながら抑えていた怒りをぶちまけていた。

死にたいけど死ねない。

戦えど戦えど無限に続く地獄。

紅い髪の少女のしているもの、聞いているもの。その苦しみをシエルは知っていた。

「死よりも辛い事だつてあるんです……つて遠野くんに教えてあげたんですがね」

静かに呟く言葉に反応して秋葉はぼんやりとシエルの方を向く。

そして、穴のあくほどカソック服の少女の顔を凝視した。

秋葉がここまで真面目に彼女の顔を見たのは初めてだ。

「知っている……の？」

「知らないとわかるわけはありませんよ。自分の両親を、初恋の人の血を啜り犯す苦痛を。どんなにやめようと心では抵抗しても、身体が勝手に罪を重ねて行く絶望感は……体験した人以外わかるわけがありません」

「……」

「どんなに想像力があつたところで想像は想像に過ぎません。地獄にいる者の痛み

を知っているのは、同じ地獄にいる者だけですよ」

秋葉はシエルを見上げる。

今までは見えない壁を立てて距離を保っていた。赤の他人という距離感が崩れた。今の彼女を見る目は同じ苦しみを知る者の……同士を見る目。

「わたしは秋葉さんの遠野くんへの恋はわかりません。正直言つて狂うほど人を恋したことはありませんから。でも、あなたがいる地獄は知っているつもりです。そして、それを終りにする方法も」

音もなく取り出した長剣を秋葉の首に当てながら言葉を続ける。

「どうします？ 人を襲つてないあなたを斬るのは許されませんが、どうせわたしは赦え切れない罪を犯した罪人。今更、一つや二つ上乘せしたところで構いませんが」

語調はいとも軽やかだ。

しかし、青い目は恐ろしいくらい真剣に秋葉を見つめている。

今、ここで秋葉が承知すれば、その場のためらいもなく首を断ち切るだろう。

「兄さんは恨むと思えますよ」

「遠野くんとは『さよなら』しましたから——」

軽く溜息をつきつつ言い放つ。

見下ろす目と見上げる目の間に空気を震わすような緊張感が生れる。

びりびりとした空気の中、紺碧の瞳を持つ少女は青い瞳を凝視したまま静かに口を開いた。

§

「——せっかくですけど」

§

紺碧の瞳がシエルを完全に捉える。

その目に妖しい光りが一瞬灯った。

途端にシエルの全身が紅い波に覆われる。

檻髪——全てを捕食する秋葉の特殊能力によって。

「私は兄さん以外の手にかかるつもりはありません」

入口から差し込む月の光のように静かで冷たい声が部屋に響く。

片やシエルの方はなぜか動かない。

逃げようとも、反撃しようとも——もがこうとすらもしていない。

「さすがは狩人。ずいぶん落ち着いているんですね」

「殺意が感じられませんから」

「本当は殺しあっても構わないのですけどね。忘れました？ 私、あなたのこと大嫌いなんですよ。同類だろうがなんだろうが知ったことではありません。嫌いなものは嫌いなんです。——でも、兄さんにいい子にしているようにって言われましたからね」

不敵な笑みが紅い髪の少女に浮かぶと、シエルを覆っていた紅い繭がすつと引いて行く。  
それに応じるようにシエルの方も長剣をしまう。

「お引き取り願いません？ もう、あなたは私たち兄妹には関係無い人です」

「遠野くんを放っておけとも？」

「兄さんに別れを告げられたんでしょう？ お節介というものです」

わざわざ憎々しげな物言いでシエルを突き放す。

そこには狂人でも病人でもなく、かつてシエルが見た誇り高い少女がいた。

「こんな状況……放っておけるわけないでしょうー！」

「私は私の都合で、兄さんを愛した。兄さんは兄さんの都合で私を愛した。お互いに見ているものは違うのかもしれないませんが……二人とも満足しています」

「そういうのは妄想っていうんですー！」

「だからどうしたって言うんです？ 私たちは幸せなんですよ。それともシエルさんはもつと幸せにできるとでも言われるのですか？」

「……」

「できもしないなら——引っ込んでてください。目障りだわ」

主導権は完全に秋葉が握っていた。

シエルがいくら理を持って説こうと意味はない。

秋葉は確信犯なのだ。

彼女の情を満足しうる答えを導き出さなければ、一笑に付されるだろう。

だが、シエルにはそんなものはない。

力尽くで抑える切り札ならあるが……。

「遠野くんを悲しませたいんですかっつー！」

切り札を切った。

あらゆる情理を越えて、秋葉を捉えられる唯一の言葉。

——しかし。

「そうさせないため、死に方を工夫しているのでしょうか？」

切り札は一瞬にして砕かれた。

秋葉は微笑みすら浮かべている。

「……くふう？」

「あなたが演技と言ったものですよ。兄さんの罪悪感を消し責任感を満足させること。簡単にいえば私が満足しているということを見せることよ」

あまりに身も蓋もない返答にシエルは呆気にとられている。

一方の秋葉は疲れてきたのか壁に背中を預けながら話しを続ける。

「私自身が本心から満足しないとリアリティが出ないでしょう？ だから満足出

来る状況を作っているわけです。あなたの問いに演技じゃないと言ったのはそういうわけです」

一度軽く目を伏せた後、うつとりするような口調で言葉を続ける。

「兄に介抱されつつも、どんどんと病み衰えて行く妹……ロマンじゃありません？」

「わからない……」

頭をふるふると振りながらシエルは後ずさる。

怖い。

紅い髪の少女が怖い。

わからないから。

シエルには秋葉が何を考えているのか、何をしようとしているのかまったくわからない。

「どうしました？」

「なんで、なんであなたは自分の死を弄ぶことができるのですか！？」

「ああ、あなたの宗派では自殺は最大の罪でしたね」

「ちがう！ 他人の決めたことなんて関係ない。なんで生きたいって思わないのですか？ 死にたくない。わたしは死にたくない。カビの生えた吸血鬼に利用されるためだけに生れてきたなんて思いたくない……嫌。そんなの嫌。神様が認めてもわたしが認めない！」

半狂乱になりながらシエルは叫ぶ。

まるで秋葉の思考に呑み込まれまいと必死に抵抗するかのよう。

それを憐れんだ目つきで秋葉は見つめる。

「かわいそうに。自分のしたいこともないのですね。あなたは」

「したいことって……あなたは自己犠牲がしたいのですか」

「自己犠牲？ 兄さんじゃあるまいし、私はそんなことをするようなナルシストじゃありません」

「それ以外のなんだったというんですか！」

「頭が悪い人ですね。私の目的は兄さんを独占することですよ。兄さんあつてのものです。自分だけのナルシズムに走っても意味が無いじゃないですか」

半ば呆れつつ秋葉は答える。

挑発のためにシエルの神経を逆なですることを言っている……というわけでない。思っていることをただ並べただけという様子だ。

「独占すると言つても、兄さんを壊しては意味がありません。だから兄さんが壊れる前に私が死ぬのですよ。私以外の女に二度と目を向けられないような鮮烈な死に方で」

小憎らしいほど冷静なその顔にシエルは無性に怒りを覚えた。

怒りの原因は何か？

悲劇を利用して目的を達しようとする狡猾さにか？

止まることを知らない独占欲にか？

とにかく、この自信たっぷり顔の顔を崩してやりたかった。

彼女にはまだ切り札がある。

秋葉が知らない最後の切り札が。

それを使った時、彼女の冷静さは保てるだろうか？

怒りのままに敵意を込めて最後の切り札を切る！

「あなたの吸血衝動を治す方法はありません」

「なんですって……」

ぎろりと紺碧の瞳がシエルを睨む。

いい加減なことを言ったら許さないという視線だ。

「身体の不調はいつからですか？」

「発作が頻繁に起きはじめたのは八年前からだけど……」

「心当たりはありますか？」

「成長したからでしょうか？ 遠野一族はだいたい大人になるほど反転しやすくな

るから」

「忘れていませんか？ 八年前にあった事件を」

「……八年前？ まさか」

「そのまさかです。あなたの不調の原因は遠野くんです」

シエルを見る秋葉の視線はますますきつくなる。

一笑に付さないのは、彼女なりに符合が合う点があるからだろう。

「あなたは遠野くんに半分の命を分け与えているんです。完調には程遠い状態。それでもなんとカバランスを保っていました。吸血鬼——シキでしたっけ？ の能力で遠野の血を活性化され完全にバランスが崩壊した」

「何を証拠に……」

「そうしないと辻褄が合いません。八年前殺された遠野くんが生き返った。無くなった命はどこから持ってきたのです？ 生半可な奇跡が起きたところで助かるような怪我では無かったことは、その場にいたあなたが一番よく知っているでしょう？」

みるみる表情が変わって行く。

血の気の薄い顔がさらに白く、白蠟の如くなっていた。

明らかに心当たりがある。

しかし、頭を振ってその考えを頭の中から追い出す。

「推測にしか過ぎませんわ」

「いえ、このことはあなた以外の人……遠野くんもシキも知っています。遠野くんはあなたの父の手記から知ったそうです」

「……知らないわ。おそらく琥珀が隠したのじゃないか。あの子ならそういう小細工をやりそうだから」

さしもの秋葉の自信が揺らいでいた。

それはシエルの意図したのではなく、力無き当主としてのものであったが。

「兄さんの命が私の命……兄さんがそれを知っているって、本当なの？」

「はい。彼の記憶を覗かせてもたいましたから」

「まずい、まずいわね。最後の時まで平気なふりをしてない」と

「どういうことですか？」

「知っているでしょう？ 兄さんの性格を。私が危なくなったら私に命を返すなんてことをしかなないわよ。私の都合も考えず、それこそ自己犠牲に気持ち良く酔っ払いながら」

親指の爪をカリカリと噛みつつ秋葉は思索している。

どこをどう見ても自分のことで頭を悩まして……という風には見えない。秋葉の反応がまるまわらず、シエルはただぼうっと見つめるだけ。

そのうち痲癩を起こしたのか髪の毛をくしゃくしゃと掻き毟って喚いた。

「あーっ！ まったく、兄さんは本当にバカなんだから！ 私にこんな苦痛を与えて、それでも足りないっていうの？ 世話が焼けるにもほどがあるわよ」

吼える秋葉の力強さ。

これが自力では立ち上がれないほど病みつかれた……目前に死期が迫った人間のものであろうか。

「……でも、都合が良いといえば都合が良いわね。これで完全に正気を保つ自信を持てたわ」

「なんで、そう言い切れるのです？ あれほど狂気に陥ることを恐怖していたあなたが」

「兄さんがそこまでバカなら話は別です。私にとつて怖いのは遠野の血より、兄さんの挙動になりましたから。八年間も一人ぼっちにしておいて、また一人ぼっちにしようというの？ 冗談じゃないわ」

「同じことをあなたは遠野くんにしようというのでしょうか？」

当然の問いに秋葉はくすりと笑う。

いたずらを企む子供の顔で……、

「私を一人ぼっちにしておいたのだから……それくらいの報いは受けてもらっ

たっていいじゃない。それでおいこ」

子供のような残酷な台詞を言っただけのける。

「問題は命を返されることよ。それって侮辱だもの。この上もない侮辱。そんなこと絶対に許さない」

彼の手で編まれた紅い三つ編みをいじりながら、そう呟く。  
「まるで彼に話し掛けるように。」

「発作が苦しかったのは、髪が紅くなることを恐れたのは、それが魔物になることだと思っただけ。でも、それが全て兄さんのためになっただけというなら話は別。私だけが兄さんを救えるなんて……感謝しても良いくらいだわ、あれほど忌まわしいと思っただけの遠野の血に」

なんとも言えない晴れやかな笑顔を浮かべた後、すっと目を細める。

「だから、私の命を返すことは許さない。私の苦痛をそして喜びを全て無にすることなんて、いくら兄さんでも許さない。命を返して自分だけ楽になろうなんて……そんなこと絶対にさせない！」

そしてシエルをじつと見つめながら言葉を続けた。

「私という刻印をが刻まれた命を持って、少しは兄さんも私の気持ちわがわかるはず。全てを捧げて愛した私の気持ちわが」

無邪気に秋葉は微笑む。

だが、その笑顔にどこか狂気じみたものを感じたのはシエルだけだろうか？

「遠野くんがあなたに全てを捧げるのは認めないのですか？」

「兄さんの命は私のものなんですか？ 私のものを返しても捧げることに出来ないわ。兄さんに捧げてもらおうのは、自分のものでないと」

「自分のもの？」

「私が命を捧げるのは未来を捧げるということ。捧げてもらおうなら同じく未来をもらうわ。未来永劫、私だけを愛し続けるとういことを」

はっと息を呑むシエル。

彼女にもやっとなかかった。

なぜ、秋葉が生に恬淡で死にばかりに固執しているかの意味を。

「死ぬことによつて、遠野くんを独占しようというつもりですか……」

「兄さんは冷淡な方ですからね。それくらいやらないと駄目なんですよ」

同性であるシエルですらもぞくりとする妖しい笑みを浮かべながら秋葉は答える。怖いぐらいの『女』の顔で。

「回復すれば兄さんとしては気が楽でしょう。罪悪感がなくなるから。そして今まで通り誰にでも優しい兄さんに戻ってしまう。そうだったら、私は嫉妬の鬼になつてしまわうわ。今までならまだ耐えられた。妹だったから。良い妹を演じるという道があった」

視線に力が込められる。誇りと冷酷さをエネルギーに。

「でも、今は遠野志貴の女よ。彼の女として他の女の存在など許さない。その時こそ、本当に私は血を吸う鬼になってしまうわ。遠野の血なんてではなく、自身自身の意志で」

シエルは無言で秋葉を見つめている。

同じ女である彼女にはその気持ちはわからないでもない。実行するかどうかは別の話ではあるが。

「だから、私は死ぬしかないのよ。遠野秋葉のまま終るためには」

言葉とは裏腹に楽しそうに秋葉は語った。

目の前に死があるからこそその笑顔。  
終りが見えているからの安らぎの顔。  
その顔を見たシエルはゆっくりと背を向けた。  
酷く疲れた顔をしながら。

「帰られるのですか？」

「ええ、あなたに言われたように、私には何も出来そうにありませんから」

「……そう」

「最後に一つだけ聞いてよいですか？」

ぴたりと止まったシエルは背中を向けたまま秋葉に問う。

「その前に私の質問を聞いてくれますか？」

「どうぞ」

「私の残りの命を兄さんにあげると、兄さんはどうなりますか」

「おそらくは完調に戻るでしょう。あなたと同じで命が足りないことが原因による虚弱体質ですから」

「そうですね……良かった。兄さんも丈夫になれるんですね」

心からほっとしたような声を秋葉は漏らす。

彼の病弱さに秋葉は相当頭を悩ませていたのだろう。

上機嫌な声音で彼女は話し掛けてきた。

「それで、シエルさんの質問は？」

「あなたは、それで満足なのですか」

一瞬の沈黙の後。

静かに声が響いた。

「はい。私の夢は叶いましたから」

秋葉はとびっきりの笑顔でそう答えた。

背中越しで聞いていたシエルもそれはわかった。わかってしまった。  
おそらく、先程部屋を出ていった志貴にも負けない晴れやかな笑顔であろうと。

志貴は笑った。己の夢を語りながら。

秋葉も笑った。己の夢が叶えられることに。

互いは互いを心底から愛している。

それは間違いないだろう。

そして、二人とも幸せだ。

これも間違いない。

だが、二人とも本当に相手のことを見ているのだろうか？

その疑問にシエルには深い溜息をついてしまう。

わからなかった。

彼女には何もわからなかった。

何が正しくて、何が間違っているのかを。

シエルの思いに関係なく、二人はそれぞれの正しい道を歩んでいるのだろう。

所詮はシエルは部外者だ。

助けることはおろか心配することも許されない部外者。

志貴も、秋葉もシエルが差し伸べた手を振り払った。

友として同じ労苦を分かちあうこと拒否したのだ。

彼女に出来ることは何もない。

何をすることも許されない。

できることはただ一つだけ。

「ありがとうございました。——さよなら」

永遠の別れの言葉を口にする、一度も振り向かずシエルは部屋を出て行った。  
すつと音も無く扉は閉められ、重い足音はゆっくりと離れていき、完全に消えた。

室内は再び静寂と漆黒の闇で満たされる。

一人きりになった秋葉は崩れるように蒲団に横たわった。

はあはあと荒い息をつきながら。

いつもの発作だ。

その発作に秋葉は身を委ねている。

今日は話しすぎた。もはや苦しむだけの体力は残っていない。

叫ぶことも暴れることもできずに、静かに苦痛を受けとめている。

苦痛が秋葉を浸食していくことに気は失われて行く。

目から光りが失われ、硝子細工に。

肌は生気の無い白蠟のものへと。

痩せた身体は枯れ木の如く。

人から人形へと変わって行く。

ただ、息をする「モノ」へと。

いや、まだ息ができると言ったほうが良いか？

息もできなくなる日は近い。

痛みを痛みと感じなくなる日も。

だが、今はまだ、たしかかな痛みが全身を包んでいる。

そこそがに生きていくことの証明。

まだ、時間は残っていた。

蜜月を過ごす時間が。

明日も苦痛を噛み殺し平気な顔をして兄に逢うのだ。

蜜月を心置きなく味わうために。

そして、十二分に楽しんだ後、終りにするのだ。彼女自身の手で。

その時、兄は本当に彼女のものとなるのだ。

「……兄さん」

泣き笑いのような言葉を呟くと静かに目を閉じ眠りにつく。  
ただ一つの楽しみを胸に抱きながら。

了